

# エチオピアでの2年間を終えて

登坂 哲也

## はじめに

2003年、花卉園芸学研究室を卒業し、施設園芸学を学びたいと考えた私は、岐阜大学大学院への進学を希望した。大学院で施設園芸学を学んでいくうちに、自らの知識や技術がどの程度世界に通用するものなのか、疑問に感じ始め、独立行政法人 国際協力機構（以下、JICA）で青年海外協力隊員（以下、JOCV）として途上国で活動しようと思ったのである。

そして2003年8月、岐阜大学大学院で学生であることに未練を残しながらも、海外で自らの力を試したいという気持ちのほうが強く、中退を決めたのである。

## 「いざ、エチオピア」の前に

選考試験を無事に通過し、福島県二本松市での3ヶ月間に及び語学訓練を終了した私たち約200名は、それぞれの国に分かれて派遣される日が来た。エチオピアへ派遣されるのは私を含めて5名、年齢も職種も全く異なるメンバーであった。

「エチオピアは『アフリカの角』と呼ばれる場所に位置する世界最古のキリスト教国家で、アフリカ諸国の中でも唯一独立を守った国としても知られており、現在では Africa Union (AU) 本部 Economic Commission of Africa (ECA) 本部が置かれるなど、ケニア・南アフリカ共和国に並ぶアフリカの中心地として急成長している国である。また人口7,000万人を擁するこの国には約80の民族と50の現地語が存在しているが、公用語としてはアムハラ語、学校では英語が用いられている。首都の標高は約2,300mで、もっとも低い場所はダナキル砂漠で標高は - 126m、もっとも標高が高い場所はラス・ダッセン山で4,543m 」。

日本を出国する前の私のエチオピアに関する知識とは、この程度である。未知の国での新たな生活がスタートしたのである。



インジェラとワット

## インジェラ・ティプス・ワット ... WHAT?!

まず、問題となったのが食生活である。エチオピアは先にも紹介したとおり、世界最古のキリスト教国家で独立を守り通した国、それ故に食事も他のアフリカ諸国とは違い、個性的である。主食はインジェラと呼ばれるクレープのようなもので、日本人観光客には「ぼろ雑巾」と言われている。原料であるテフ [Eragrostis tef] を発酵させ焼いたもので、これにワットと呼ばれるシチューやティプスと呼ばれる焼肉のようなものを巻いて食べるのである。だが、最初はインジェラの酸味が強すぎて、衛生環境が悪くて等、胃薬を離せない生活を余儀なくされる人もいたが、私は幸い、群馬の山奥で大切に育てられた(?)おかげで、食あたりは一切なかった。この他にも生肉や、内陸国であるにも関わらず生魚を食したりと、独特な食習慣を持つエチオピア人ではある。だが、非常に保守的で、日本食などの見慣れない食べ物には抵抗を感じるようで一切口にしない人も多く見受けられる。

また、エチオピアはコーヒー発祥の地としても知られ、人々は日常的にコーヒーを飲む習慣があり、ハレの日にはコーヒー・セレモニーと呼ばれる、日本の茶道のような文化も持っている。

## ハワサ大学農学部園芸学科

エチオピアへ到着し、首都での3週間の現地語訓練を終えた2004年9月、私は南部諸民族州の州都アワサにあるハワサ大学農学部園芸学科に赴任した。ハワサ大学は2000年に新設された総合大学で、現在は7学部8,000名の生徒が学んでいる。その中でも農学部園芸学科は2003年に設置されたもっとも新しい学科で、教員数も赴任当時は私を含めて4名。担当講義は園芸学科1年生を対象とした「観賞植物生産学」と、園芸学科3年生の「施設園芸学」と、植物科学科3年生を対象の「花卉園芸学」の3つの講義であった。

担当になったとはいえ、大学を卒業し、大学院に進学するも中退。まともな実務経験はまったく無く、途方にくれる毎日だったが、任されたからにはやるしかない。でも意気込んで望んだ最初の講義は大失敗に終わった。その理由は、私がエチオピアの教育をまったく理解していなかったということに最大の原因があった。エチオピアでは公用語でアムハラ語、教育では英語を用いるという話を聞いてはいたが、日々アムハラ語で会話している学生が、大学の講義で使われる専門

英語をその場で理解することは困難である。そのために教員はすべての内容を黒板に書くか、プリントを用意するという事を全く知らなかったのである。

それからは毎日が配布用のプリントの準備に追われたが、なるべく時間を作り、学生との対話を持つようにして授業内容を考えるなどの工夫を行った。

### 「君は日雇い労働者か!？」

新設大学の新設学科ということもあり、赴任当初は園芸学科が自由に使える圃場がなく、植物科学科の農場の一部を利用させていただくという形を採っていた。特に花卉部門には自由な場所が無く、実習に支障を来していたために、荒地の開墾を始めることにした。学期間休みの学生がいない間に農場を整備して、新学期スタートと同時に花卉も実習が出来るようにしなくてはと考え、除草作業をしていたある日、学科長に呼び出された。「君は日雇い労働者か？」と、質問されたのである。最初、質問の意味が全く分からずがカンとしている私に、学科長は「除草作業は日雇い労働者の仕事であり、君の仕事は机の上にある」と一喝されたのである。

日本では教員と学生が一緒になって圃場の整備をし、植物の成長を見守ることが当たり前のように考えられているが、エチオピアでは許されない。では、エチオピアの大学教員はどのように実験や研究を行うのかというと、大半の教員は博士号取得と同時に、実験・研究は行わない。博士号取得を目指している教員は、農場の技官に指示を出し、データ収集をさせ、農場に行くのは非常に稀なのである。これは文化の違いだからと許される事なのであろうか。



ハワサ大学 メインキャンパス



ハワサ大学 農学部正門



赴任当初の大学農場

## 銃撃戦勃発

雨期明けのある朝、家の玄関を出た私に聞こえてきたもの、それは銃声だった。我が家から大学までは直線距離で約200m、こんな時、JICAはといえば「自宅待機し、情報収集してください」と。JICA関係者は自宅待機中、現地人は自宅に電話を持っていないという状況下でどのように情報収集をしるというのだ、という疑問を感じながらも、講義開始時間が迫っているため、携帯電話を片手に出勤した私を待ち受けていたのはいつもと変わらない学生であった。

講義中も鳴り響く銃声に戸惑う日本人教師、そしていつもと変わらない学生。こんな姿を見て学生をたたくし思いながらも、こんな状況下でも動じないような人間を育ててしまったエチオピアの環境に少し腹立たしくも感じられた。

講義終了後、学内で学部長に会い話を聞いてみると、「与党の選挙妨害に対する野党の反乱である」との事だった。学部長曰く、「農学キャンパスでは、学生寮の食事が少なくなる限り暴動は起こらない」と自信満々であった。

その後も度々、小規模の暴動は起こったが、銃撃戦に発展することもなく解決された。また学内で学生の暴動が発生した際も学部長が農学キャンパスへの警官隊の突入を阻止し、学生と対話するなど、的確に対応した。不安定な政権下であるがために、日本のように学部長という役職が単なる飾りではなく大きな意味を持ち、またそれなりの人格者でなければ出来ない重要なポジションであるとも感じられた。

## 気の良いオヤジ達

オフィスにいても来るのは雑用や上司の愚痴を言う同僚ばかりであり、私が専ら時間を過ごしたのが農場である。そこは英語が通じない、つまり言葉がろくに通じない環境である。しかし、そこには「気の良いオヤジ達」がいる。民族も様々である、アムハラ族もいれば、ワラエタ族もいる、シダモ族もオロミア族もいる。彼らの共通語は公用語であるアムハラ語である。しかし、同一民族同士ではそれぞれの言葉を未だに日常的に使っている。私の3週間学んだアムハラ語では到底会話にはついていけないが、彼らにとってはそんな事は問題ではないのだ。外国の人とコミュニケーションを取るという事を素直に楽しんでいるのである。

そしてアムハラ語の挨拶を覚えるので精一杯であった私に、各民族の挨拶を覚えてくれたりもする。彼らは非常に頼りになり、厳しい私の現地語の先生である。私がワラエタ族の挨拶を覚えた時、シダモ族の挨拶を覚えた時、たった一言のフレーズなのに大喜びしてくれた。ろくでもない卑猥な現地語を覚えてくれたのも彼らである。そしてこんな歌を覚えてくれた、

アディス アスタマリ カ ジャパン イマタ  
マスタマルンティト バ ボックス ミマタ

日本語に直訳すると「新任教師が日本から来た、授業中に殴られた」という意味である。これは、日本人が暴力的であるという意味では決してない。彼らは小中高の授業の中で日本の事も勉強する。資源の乏しい国、小さい国、でも世界の中でも有数の技術立国である日本、そしてその基礎を築いてきた教育というものがいかに厳しいものであるかを表現したものであると、友人は教えてくれた。

日本人は、エチオピア人から非常に尊敬されている。私は日本に生まれたというだけで、これまでの人生で特に何をしてきたわけでもないのに、尊敬される対象なのである。日本にいと日本の偉大さが全くわからない。これまでオーストラリア・中国に旅行した事はあるが、日本が偉大であるなんていう感想は持たなかった。オーストラリアは先進国だし、中国は日本と近すぎたからだろう。今更ながら、私はそんな尊敬される日本人であったであろうか？ 配属先であるハワサ大学農学部付属農場における日本人の立場が悪くなった場合、この元凶は私である。ただし、日本人の評価が非常に高まった場合もその評価は私に下されたものである。後者である事を祈るのみである。

## 援助の功罪

日本を含めた海外の援助にも大きな問題があると思う。いまやエチオピア人は援助なしでは生活できない。こんな環境を作り上げたのは日本を含めた先進国である。食糧援助は海外の人々を思いやる美しい行為であるというのは単純な発想である。本当に途上国の人の事を考えるのであれば、食料援助や資金援助などという単純な発想には行き着かないはずではないだろうか？ 本当に途上国の人の事を考えるのであれば、途上国にあるものを利用し、海外の資金援助を一切入れ



日本のODAで建設された道路

なくても、彼らが生活できるだけの知識と技術を与えてやれば良いのではないだろうか？

エチオピア人の同僚がこんな事を言っていた、「外国人が来ると、道端に乞食が出る」と。援助によって国は貧しくなるのである。

### 終わりに

2004年10月から切りバラ輸送のための定期便がオランダとエチオピアを往復する事になり、急速に成長し続けるエチオピアの花産業は、現段階ではエチオピア



大学院園芸学専攻の学生たち

人はその中の単純労働者でしかない。多くの切りバラ生産者は海外資本であり、経営者もインド人が多数を占める。

そして、2006年9月、ハワサ大学農学部園芸学科第1期生60名が巣立つ予定である。たった2年間で彼らに教えられたことは限りなく少ない。そしてやる気の無い学生も目立ったことは事実であるが、これからのエチオピアの花産業を支えるのは紛れもない彼らなのである。そんな「アディスアベバ」(訳：新しい花)に私は期待せずにはいられない。

## トピックス

### 国際園芸博覧会「ロイヤルフローラ ラチャブルーク2006」の概要

1. 開催期間 平成18年11月1日～平成19年1月31日(3ヶ月間)
2. 開催場所 タイ王国 チェンマイ
3. 開催規模 予想入場者数 200万人  
参加国 約30カ国
4. テーマ等 タイ国王在位60年及び生誕80年の祝賀記念行事として開催  
テーマは「人類の愛の表現」

(参考) 過去における国際園芸博覧会への参加状況(農林水産省)

1990年「国際花と緑の博覧会」(大阪市)

1992年「ハーズ・ズータメア国際園芸博覧会(フロリアード 92)」(オランダ)

1993年「シュトゥットガルト国際園芸博覧会(IGA 93)」(ドイツ)

1999年「中国 99昆明世界園芸博覧会」(中国)

2002年「ハールレマミア国際園芸博覧会(フロリアード 02)」(オランダ)